

ソーシャル・エコロジーとムレイ・ブクチン
1960年代のアナキスト

Social Ecology and Murray Bookchin: An Anarchist in the
1960s

小塩 和人
OSHIO Kazuto

Abstract

The purpose of this research note is to locate a social ecologist Murray Bookchin (1921-2006) in the historical context, particularly that of the 1960s. In 1962, a half year prior to the publication of Rachel Carson's *Silent Spring*, he published *Our Synthetic Environment*, under the pseudonym Lewis Herber, alarming the possible effects of food preservatives, pesticides and X-radiation on human health. Born in New York City to Russian Jewish immigrant parents who were active in the Russian revolutionary movement, growing up as a proletarian socialist during the Great Depression, facing the postwar society of consolidated capitalism, he helped start the ecology movement, embraced the feminist movement as anti-hierarchical, and developed his own democratic, communalist politics.

During the 1960s, as the New Left and counterculture movements emerged, Bookchin popularized his libertarian and ecological ideas while he suggested "liberatory technology" using alternative, renewable energy sources and micro-technologies. In the late 1960s he taught at the Alternative University in New York and at City University of New York in Staten Island. In 1974 co-founding the Institute for Social Ecology in Vermont, he also began teaching at Ramapo College of New Jersey, where he later became an emeritus professor of social theory. As

the author of two dozen books and numerous articles, Bookchin was a radical anti-capitalist and advocated a theory of face-to-face, grassroots democracy, which has influenced the Green Movement since the 1960s. Meanwhile, he was a critic of bio-centric philosophies such as deep ecology, and his criticisms contributed to the divisions that affected the American ecological movement.

I

本稿の目的は、「ソーシャル・エコロジー」の提唱者であるムレイ・ブクチンを、アメリカ合衆国（以下アメリカと略す）における1960年代という歴史的な文脈の中に位置づけることにある。とくに1960年代は、黒人公民権運動、女性解放運動、ヴェトナム反戦運動、新左翼運動などと並んで環境保護運動が盛んになり、その終着点である1970年には、国家環境保護法やアースデイ、カリフォルニア大学アーバイン校ソーシャル・エコロジー・プログラムの創設などが成果として結実した。したがって、60年代は「革命的転換期」として記憶されている。しかし、この時代がどこまで「革命」あるいは「転換」であったのかは、解釈が分かれるところである。この研究ノートが取り上げるブクチンは、あらゆるヒエラルキーに批判的眼差しを向けることで、60年代の環境主義をはじめとする諸運動の「限界」に言及している点で重要である。¹

そこで本稿は、まずブクチンの生い立ちと主要な論考を時代順に整理し、

1 ブクチンに関する主要な論考は以下の通りである。Jennifer Biehler, *The Murray Bookchin Reader*. London: Cassell, 1997; idem., *The Politics of Social Ecology: Libertarian Municipalism*. Montreal: Black Rose Books, 1998; B. Black, *Anarchy After Leftism*. Columbia, Mo: C.A.L. Press, 1997; John Clark, ed., *Renewing the Earth: The Promise of Social Ecology*, Basingstoke: Green Print, 1990; J. Fekete, "Ontology and Value: The Ecology of Freedom," *Canadian Journal of Political and Social Theory*, vol. 7 no. 3 (Fall 1987); Karen L. Field, *American Anthropologist* vol. 86 (Spring 1992); Harold Fromm, "Ecology and Ideology," *Hudson Review* (Spring 1992); Kent Gerecke, "Ecological Reasoning," *City Magazine* [Winnipeg] (Summer/Fall 1982); Chris Goodrich, "Holism and Hierarchies," *Sierra* (Sept.-Oct. 1982); Andrew Light, ed., *Social Ecology after Bookchin*, London: Guilford Press, 1998; Michael Oppenheimer, "If It's Broke, Why Not Fix It?" *New York Times Book Review* (Nov. 25 1990); Andy Price, "Obituary" *ZNet* (2006); Peter Prontzos, "Bookchin's Epochal Ecology," *Latin America Connexions* (Sept./Oct. 1989); A. Robitaille, *L'écologie sociale de Murray Bookchin*. Ottawa: National Library of Canada, 1993; Theodore Roszak, "The Obsessive Drive to Dominate the Environment," *San Francisco Chronicle* (16 May 1982); Pavlos Stavropoulos,

次に彼の環境思想を簡潔にまとめてみる。それから、ブックチンが1960年代に展開した様々な社会運動とどのような思想的関係性をもっていたのかを検討する。その上で、彼の環境理論が社会理論との間でいかなる方向性をもっているのかを分析してみる。そうすることで、正統マルクス主義に端を発し、トロツキストを経て、左派リバータリアンあるいはソーシャル（エコ）・アナキストへと展開してきた彼が、どのようにして環境問題と関わるようになり、さらに環境派内部の論争を活性化させるようになってきたのか、歴史的な文脈に則して評価することができよう。



Murray Bookchin

II

1962年。それはレイチェル・カーソンが『沈黙の春』を出版した年として、アメリカ環境史の転換点として、人々の記憶に刻まれている。しかし、彼女の著書が世に出る半年ほど前に、ルイス・ハーバーというペンネームで『我々の合成的環境』が刊行され、環境汚染の社会経済的起源ならびに食品添加物の問題を指摘していたのであ



Rachel Carson

る。著者の本名は、ムレイ・ブックチン。1921年1月14日にニューヨーク市でロシアからの移民の子として生まれ、その後とくにラディカルな環境政治思想の指導者の立場にあり続けた人物である。ロシア革命に関わっていた彼の両親から思想的影響を早くから受けていた、とされる。その

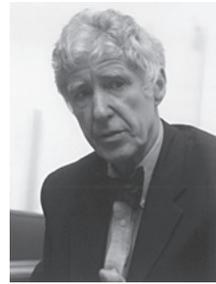
“Review” *Society and Nature*, vol. 1, no. 1, 1991; Colin Ward, “Free Cities,” *Resurgence*, no. 125 (Nov.-Dec. 1987); idem., “The Bookchin Prescription,” *Anarchist Studies*, vol. 5 no. 2 (Oct. 1997); D. Watson, *Beyond Bookchin: Preface for a Future Social Ecology*, New York: Autonomedia, 1996; C. Wicht, *Der ökologische Anarchismus Murray Bookchin*. Frankfurt: Verlag Freie Gesellschaft, 1980; A. Wolfe, “Listen, Bookchin” *Nation* 29 May 1982; C. Yeobright, “Beginnings for a Critique of the Thought of Murray Bookchin” *Black Rose* no. 8, Spring 1982; Peter Zegers, “The Dark Side of Political Ecology,” *Communalism: International Journal for a Rational Society*, no. 3 (Dec. 2002).

後ソーシャル・エコロジー、社会生態学を唱えることになるブクチンは、1930年代に十代半ばの若さで共産主義運動に参加し、30年代末までに権威的なスターリン主義に幻滅した彼は、スペイン内乱と関わるようになり、1939年9月のスターリン・ヒットラー協定まで、ヨーロッパにおける反ファシスト派の共産主義者として活動した。若いころからアナキズムに関心を寄せ、トロツキー存命中は、アメリカン・トロツキストに共鳴して活発に活動した。高等学校卒業後は、鋳物工場や自動車製造工場の労働者として労働運動に参加し、ブクチンは左翼、無政府主義者、エコロジストとして活躍を始めた。1940年代にアメリカ陸軍での軍役を終えると、ブクチンは自動車業界の労働運動に加わり、とくに全米自動車労働組合(United Auto Workers)に関わった。

ブクチンは1950年代、論文「食品中の化学物質の問題」を皮切りに、エコロジー問題に関心を示し、この著作はまずドイツで1955年に出版され、その後彼はドイツ緑の党の創設に関わった。1960年代にはアメリカのカウンターカルチャー、新左翼運動に加わり、ここで社会生態学を唱えるようになった。1960年代後半には、ニューヨーク市立大学スタテン島校とオルターナティブ・ユニヴァーシティ (Alternative University) で教鞭を執った。1974年には、ヴァーモント州プレインフィールドにダン・チョドルコフと共同でソーシャル・エコロジー研究所を設立し、研究ならびに学部・大学院教育に携わった。同研究所では、環境哲学、社会理論、オルターナティブ・テクノロジーといった講義を提供した。同年、ニュージャージー州ラマポ・カレッジで社会理論を教え始め、1983年に名誉教授となるまで専任教授を勤めた。やや乱暴にまとめてみると、ブクチンの思想的基盤は、正統マルクス主義に発し、トロツキストを経て、左派リバータリアンあるいはソーシャル・アナキスト (エコ・アナキスト) へと展開してきたのである。

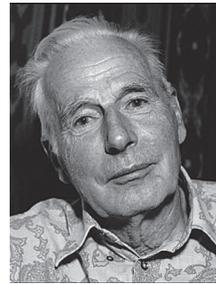
さて、レスター・ブラウンの指摘を待つまでもなく、人類400万年の歴史を振り返るならば、一万年前の「農業革命」、十八世紀の「産業革命」に続き、「環境革命」という人間と自然の関係が問われる大きな転換点にさしかかり、人類存続のために、環境保全型の社会への転換が叫ばれている。ここで注意すべきなのは、環境保全を言う場合に、とすれば人間が自然とどのような関係をもつべきか論じている、という点である。それ

はアルネ・ネスが提唱したディープ・エコロジーにみられるように、環境保全において人間と自然の関係が中心に位置づけられ、さらに人間を一枚岩にとらえる傾向である。極論すれば、自然観の変革を重視している分、社会構造変革の優先順位が相対的に低い。あるいは、人口問題を重視し、政治経済的不平等を軽視する。さらには、神秘的な「東洋思想」への憧憬がある一方、西洋社会における権力構造への感度が鈍い。これらの点をブクチンは問題視した。



Lester Brown

このような傾向に対して、ブクチンのソーシャル・エコロジーは、＜人間と自然＞の関係のみならず＜人間と人間＞との関係にも注目し、これらの関係性の相互連関に注目してきた点に特徴がある。単純化して言えば、階層的な人間関係つまり社会的不公正が、環境破壊をもたらしてきた、という認識である。国家、資本主義、専門家による支配が、ヒエラルキーという社会病理を引き起こし、環境問題を解決できないようにしている。つまり、ブクチンの社会哲学は、男と女、専門家と素人、資本家と労働者、国家と民衆といった様々な二元論の一部、たとえば階級あるいはジェンダーを部分的に取り上げ、特定のヒエラルキーに全ての問題群を還元してしまう見方を狭いとして批判するのである。



Arne Naes

こうした社会哲学が基盤にあるブクチンの自然哲学によれば、人間を生物に還元して理解しようとするディープ・エコロジーは厳しく論難される。人間と自然の不連続面のみを強調する西欧近代の二元論、人間と自然の連続性のみを強調する還元主義は、いずれも一面的だとして許容しない。ブクチンは、近代文明の画一化志向、たとえばモノカルチャー的な農林業は、多様性を内包する自然の流れに逆行するものとして批判するが、かといって復古的な反近代主義を唱えるわけではない。むしろ、近代の延長でもなく、復古でもない、まったく新しい形の未来社会を構想しようとするブクチンは努めてきたのである。

これまでに彼の著作は、いくつか日本語に翻訳されてきた。1971年の

代表作『脱希少性アナキズム (Post-Scarcity Anarchism)』は『現代アメリカアナキズム革命』鰐淵壯吾訳 (ROTA 社、1972)、1986年の著作『現代の危機 (The Modern Crisis)』の一部と1991年の雑誌論文「リバータリアンの地域自治主義」が『環境思想の系譜』第二巻 (東海大学出版会、1995)、1990年の『社会再構築 (Remaking Society)』が『エコロジーと社会』(白水社、1996)として訳出されている。演繹 (deduction) より展開的思考 (education) を基盤とし、目的論的にならずに自己をより解放する可能性を探ろうとしたブクチンは、次のように記している。

「拙著『エコロジーと社会』の日本語版が出版されるのは、まことに喜ばしいことです…潜在的に理性的な人類が、いかにして合理的な社会を最終的に実現できるかということなのです…『エコロジーと社会』が描く状況や希望のほとんどすべては、普遍的なものです。ひとつの国やひとつの文化にのみかかわることはなく、人類全体に関係することなのです…好むと好まざるとにかかわらず、世界はひとつになりつつあり、国境やエスニシティの障壁にもかかわらず、私たちは共通の運命に直面しているのです。すなわち、人類という種全体のニーズのために社会的な諸目標を根本的に変革するか、それとも、多くの人を犠牲にして少数の人々がたえず富と権力を蓄積していくことに悩まされ続けるか、ということなのです。近代兵器の高性能化に加えて、二一世紀の始めにはさらに一層危険な破壊手段が開発されている可能性もあり、市場の盲目的な力と、富と権力を蓄積することにしか関心のない企業幹部のいかがわしい指導に社会の発展を委ねるには、世界は危険すぎる場所なのです。」²

III

ところで、ブクチンは、1960年代を平等主義的理想の時代と形容し、その一角に公民権運動を位置づけている。さらに、イギリスにおける核軍縮キャンペーン (CND)、アメリカにおける女性による平和のためのストライキなど、1950年代の「反核兵器」運動に端を発する形で、いくつかの潮流が合流して新左翼が登場した、と考えている。いわく「[新左翼は]旧左翼とは目的、組織形態、社会変革の戦略において、はっきりと区別さ

2 ムレイ・ブクチン『エコロジーと社会』藤堂麻理子・戸田清・萩原なつ子訳 (白水社、1996) 2-3頁。

れるものであった。革命のプロジェクトは回復されつつあった。ただし、プロレタリア社会主義からの継続ではなく、マルクス主義以前のリバータリアン的な理想を伴ってであった。このプロジェクトに浸透していたのは、新しいライフスタイル、性的自由、そして広範なコミューン的でリバータリアン的な諸価値を強調する「若者の反乱」の対抗文化的な系統であった。社会思想、実験、諸関係の多彩な展望が登場し、急進的な変革に対する途方もない期待で輝いていた」と。³

1960年代の新左翼および対抗文化は、ブクチンによれば、少なくとも初期段階において、アナキスト的でユートピア的であった。たとえば意思決定において、面と向かって討論するシステムを求め、「参加民主主義」を単に政治のみならず、生活のあらゆる面において草の根的コントロールを表すものとして期待された。また、社会生活への民主的な対応は、分権化されること、つまりすべての人が理解し把握できるヒューマンスケールなものになることが期待された。ただし、ブクチンは、新左翼によるこうした新しい自由の形への模索が、大学キャンパスを越えて広がらなかった現実を冷めた眼で見ている。いわく「フランスでは、1968年5月から6月にかけての反乱で、パリのいくつかの区で近隣の集会在が召集されたという事実があった。アメリカでも近隣プロジェクト、とくに家賃値上げに反対するストライキやゲッターにおける集団サービスに関する集会在が、気乗りのしない形ではあるが、始まった。しかし、現状の国家形態に対抗する権力として、新しい種類のリバータリアン的な都市形態を発展させるというアイディアは根づかなかった。ただし、マドリード市民運動がフランコ体制に対する甲州の批判的な感情を先導するうえで大きな役割を演じたスペインは例外であった。したがって、分権化の要求は、人々を鼓舞する重要なスローガンでありつづけた。しかし、それらは、急進的な関心が「スチューデント・パワー」に集中した大学のキャンパス以外では、明確な形式をとることは決してなかった」と。⁴

1960年代末、とくに1968年の学生や黒人による運動が過激化した時期は、世界中で呼応する状況があり、フランスでは同年5月から6月に何百万人もの労働者が学生運動に呼応する形で数週間にわたるストライキがあっ

3 同掲書、186頁。

4 同掲書、192-93頁。

た。しかし、こうした「革命に近い状況」も総じて労働者階級からは最小限の支援しか得られず、アメリカやドイツではむしろ労働者の激しい敵意が向けられたことに、ブクチンは冷たい視線を送っている。新左翼や対抗文化による運動は、現実的ではなく、想像力による反乱の投影だったというのである。いわく「もしも彼らのイデオロギーがアメリカ自身の持つ革命的な伝統と一致する人民的（ポピュリスト）かつリバータリアン的な形式を備えていたなら、数百万のかなり因習的な人々は、反戦運動やさらには新左翼そのものに対してさえ、積極的に同情的な態度を示すようになっていたかもしれない…新左翼および対抗文化による、より緩やかな、より忍耐強い、より段階的な展開があったのであれば、民衆の意識の相当部分は変わっていたかもしれない」と。要するに、新左翼が1960年代後半に、アナキズムやユートピアニズムといった当初の性格から離れていったことをブクチンは問題視したのである。⁵

確かに、新左翼が解体し、対抗文化が衰退したにもかかわらず、反ヒエラルキー、反中央集権、コミュニオン主義は遺産として残された、とブクチンは評価する。いわく「新左翼の活動家の多くが、たしかに彼らが60年代には軽蔑していた大学制度への道を進み、かなり因習的な生活を送っているというのは事実であるが、この運動はまた自由の定義と革命プロジェクトの視野を大いに拡張し、それらを伝統的な経済の領域を越え広大な文化的、政治的領域に広げていった。将来的には、いかなる重要な急進的な運動も、倫理的、感覚的、そして反権威主義的な遺産を無視するわけにはいかない」と。⁶ブクチンは、アメリカの過去に急進主義的伝統を認めているのである。いわく「自由、地域社会、相互扶助、さらには分権的な連邦制といった理想でさえもが、聖職者のヒエラルキーさえ禁じたプロテスタンティズムによる組合教会的な形式とともに、急進的なピューリタンによってアメリカに持ち込まれた。こうした急進派は、「厳格な個人主義」よりむしろ原初的なキリスト教的共同体主義を唱えた。（本質的に、武装した独唱家の孤独な「キャンプ・ファイア」という西部のカウボーイの純粋に個人主義的な「アナキズム」の理想は、村落の自作農の家族の炉辺にとって代わられた。）ピューリタンは、中央集権化した政府よりむしろ面

5 同掲書、196頁。

6 同掲書、200-1頁。

と向かって討論する民衆集会や自治政府の機構としてのタウンミーティングといったものに、大きな期待を寄せていたのである。たぶん、一貫した規則の遵守といったものより造反により大きな栄誉を与えており、この福音はまだアメリカにおける想像力に多大な影響を与えている。その影響は、新左翼や対抗文化といったものを、多くのアメリカ人が受け入れたであろう倫理的な民主主義とたやすく結びつけることができていたかもしれない」と。⁷

そして、ブクチンは将来に対して悲観も楽観もしない形で論を締めくくっている。いわく「将来の「新左翼」とでも言うべき勢力、すなわち1930年代、60年代、そしてそれに続く何十年かの経験を体現した勢力の登場への道を開く扉は、まだ蝶番で前後に揺れている状態である。それは充分に開いてもいないし、閉じてもない。その揺れは部分的には、日常の社会生活の堅固な現実、すなわち経済が、不況か上向きか、世界のさまざまな地域に存在する政治的な情勢、第三世界や第一および第二世界のできごと、国内や海外におけるラディカルな潮流の成否、近い将来に人類が直面する広範な環境変化といったものに依存している」と。⁸

IV

さて、ブクチンは多くの著作を通して、エコロジー運動の問題を批判し続けた。とくに政治的あるいは倫理的に問題がある点については、エコロジー危機を誘発する原因として厳しい追求の手を緩めなかった。とくにディープ・エコロジーに対する彼の批判が激しかったことについては、既に述べたとおりである。しかし、このことは逆にエコロジー運動や思想の中において、ブクチンを孤立させる結果も生んだ。ジョン・クラークは次のようにまとめている。「たしかにブクチンはソーシャル・エコロジーの伝統を飛躍拡大させたが、同時に彼の哲学を構築していく過程で、独善的に独りよがりなところがあって、徐々に分離的政治傾向に走り、その結果感情的で敵対的論考が笛、自然哲学の対立を強調し、彼自身ももっていた多様性をかき消していった。ソーシャル・エコロジーがある程度までブクチンと同義的に捉えられることによって、その自然哲学としての潜在性は広

7 同掲書、196-7頁。

8 同掲書、211頁。

い支持を得ることができなかつたのである」と。ブクチンが対決姿勢を鮮明にすることによって、彼自身の独自の考え方は正統な評価を受ける機会を失った。ある意味で、「真実が堪忍袋の緒を切らすと、大げさになる」とは的を射た表現であろうが、ブクチンがリバータリアンでアナキストであったことを考えると、彼の独善的な表現形態は自らに対する裏切り行為とも映る。こうしてブクチンが残した遺産は、正負両面にわたる。新境地を切り開く学術的分析、批判、処方箋が一方にありながら、他方では彼の立場に対してディープエコロジーや他のエコロジーからの疑義に対しては徹底抗戦をする脅迫観念であった。こうした態度は明らかにソーシャル・エコロジーそしてブクチンにとって痛手である。⁹

1960年代にソーシャル・エコロジーの名で確立した環境理論は、マルクーゼの影響を受けた批判的社会理論、ルイス・マンフォードの影響を受けた解放技術論、「脱希少社会」の創造を組み合わせたものであった、と言われている。イヴァン・イリイチに同意する形で、ブクチンが言う「脱希少社会」は、マルキシストの唱える「物質的豊かさ」ではなく、「各自の必要性を自立的に選択し、自分を満足させる方法を獲得する自由を可能にする技術的発達が十分であること」を意味していた。彼の脱マルクス主義声明は、1969年の論考「聞けマルキシスト！」に集約されている。ソーシャル・エコロジーはある意味でエコ無政府主義であると言えよう。彼によると、環境危機は、官僚国家と資本主義による階層社会と権力に原因があるというのである。要するに、弁証法的有機主義、相互的社会生態的倫理、補完主義の倫理、新しいエコテクノロジー、そして新しい人間の関係性つまりエココミュニティといった有機的な思考様式だ、という。

1960年代に立ち現れた様々な新しい社会運動は、カーソンの『沈黙の春』の影に隠れる形で、ブクチンらの理論家・活動家らが支えていた、と言えよう。1950年代から60年代にかけて、社会批評家ポール・グッドマン、ドイツの哲学者ハーバート・マルクーゼらと並んで、ブクチンは少数ながら既存の「先進的産業社会」に挑戦を厭わない学生や知識人たちの心をつかんでいたのである。その中には、必ずしも狭義の環境問題、すなわち人間と自然との関係性について論じたものだけではなく、それでも生産・消費・都市化といった今日の環境主義と深くかかわるテーマの核心に

9 John Clark, "A Social Ecology" *Capitalism, Nature, Socialism*, vol. 8 no. 3, 1997, p. 9.

触れる問題を考察していたのである。

そもそもブクチンがはじめて環境問題について論じたのは、第二次世界大戦後のアメリカにおける科学と技術の問題を取り上げた時である。1950年代初頭に連邦議会の公聴会で取り上げられた問題、すなわちブクチンの論題にもある「食品における化学物質の問題」によって、彼の長きにわたる思索と活動が始まったのである。そして1962年に、第二次世界大戦後に立ち現れた新たな環境被害について大著を世に問うた。すでに二十世紀半ば、主要感染症への対処はできるような体制が整っていたものの、新たな公衆衛生問題として心臓病やがん等が問題視されるようになった。それらの新しい問題群をブクチンは「ヒューマン・エコロジー」の課題として認識し、主に農薬や核などのゴミによる大規模汚染に起因するものとして捉えたのである。「人間生物戦争」という名称のもとで、人間にとって清浄な大気が必要であるにもかかわらず、産業化は工場における生産を優先していることから明らかな通り、市場の法則が生物の法則よりも優先されていることの問題を鋭く指摘したのであった。¹⁰

3年後の1965年、ブクチンは『都市の危機』と題した書を世に問い、第二次世界大戦後のアメリカ社会の問題点を再び公衆衛生の観点から暴き出して見せた。つまり、大気汚染や水質汚染、有害物質や核廃棄物の問題が、人々の日常を蝕む精神的ストレスや見返りのない無味乾燥な仕事や消費と密接に関わっていると論じたのである。いまや都市と郊外が生活の中心となったアメリカにおいて、こうした問題がその外側に位置している農村や田舎そして大自然に対しても非常に悪影響を及ぼすようになっている現状を告発したのである。そこで、ルイス・マンフォードよろしく、ブクチンは都市のキャリング・キャパシティすなわち生態学的な意味における定員を遥かに越えてしまい、土地と都市との関係が決定的に悪化している、と警鐘を鳴らした。¹¹

しかし、ブクチンは新たな技術の発展によって生産が持続可能となり、「土地と都市とを合理的で生態的に統合する機会が訪れた」とも考えてい

10 Lewis Herber (pseudonym Murray Bookchin), "The Problems fo Chemicals in Food," *Contemporary Issues*, vol. 3, no. 12, June-August 1952, pp. 206-41; Murray Bookchin, *Our Synthetic Environment* (New York: Knopf, 1962), p. 26.

11 Lewis Herber (pseudonym Murray Bookchin), *The Crisis in the Cities* (Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1965), pp. 15, 194.

た。彼は、1970年代のオイルショックより遥か以前から、たとえば太陽光発電、風力発電、潮流発電などの代替エネルギーを「産業文明を持続させるもの」、「経済的に損失がなく、人体に悪影響を与えないもの」として提唱していた。これらのエネルギー源は、各地域の状況に合わせて選択されるべきものであり、そうすることで小さな都市が全米に拡散することが期待された。つまり、ブクチンにとって、代替エネルギーなどの新しい技術革新は、環境問題に対処する過程で、人間らしいスケールの新しい地域共同体を生み出すことを意味していたのである。¹²

ブクチンによる最大の貢献は、伝統的アナーキズムと現代的環境思想を組み合わせたとところにある、とピーター・マーシャルは言う。そうすることによって、1960年代以降の環境保護運動の中に自由意志論を根付かせたという。ちょうど、19世紀末にクロボトキンが新たなアナーキズムを生み出し、革命的動きを与えたように、ブクチンは新たにアナーキズムにエコロジカルな潮流を作り出したのである。事実、ブクチンは次のように述べている。「個々人が社会政策の決定に直接参加できるようにするためには、社会的ヒエラルキーや支配を即時撤廃する必要がある。これが可能になる唯一の方法は、国家権力を解体し、自治権という名の権力を個人に与えることなのである」と。つまり、彼は旧左翼つまりマルクス主義的な思考ではなく、まさに自由意志論を唱えていたのである。¹³

V

冒頭にも述べた通り、1960年代は「環境革命」の時代の幕開けとして認識され、人間と自然の関係が問われる大きな転換点だ、と評価されてきた。そして、60年代以降、人類存続のために、環境保全型の社会への転換が叫ばれてきた。ここで注意すべきなのは、環境保全を言う場合に、〈人間と自然〉との関係を指していたという点である。それは既述の通り、ディープ・エコロジーにみられるような、環境保全を〈人間と自然〉の関係と位置づけるばかりか、人間集団を十把一絡にとらえる傾向をブクチ

12 Murray Bookchin, *Contemporary Issues*, vol. 10, no. 39, August-September 1960, pp. 191-216; idem., "Ecology and Revolutionary Thought," *Anarchos*, vol. 1, no. 1, February 1968.

13 Murray Bookchin, *The Ecology of Freedom* (Palo Alto, CA: Cheshire, 1982), p. 340.

ンは問題視した。確かに「小文字の」ディープ・エコロジストであるネスは社会的不平等を軽視していなかったし、彼がガンジーの非暴力への傾倒したことは必ずしも神秘主義にもとづくものとはいえない。しかし、「大文字の」ディープ・エコロジストたとえばデイブ・フォアマンや環境保護団体アース・ファーストなどにとって、人口削減は必要絶対条件として論じられ、その延長線上で移民制限や人道支援拒否・餓死容認などの極論が出てきた。¹⁴



Dave Foreman

そもそもエコロジストとしてのブクチンは、1962年カーソンの『沈黙の春 (Silent Spring)』に半年先んじて、『我々の合成的環境』を出版し、『環境保護の1960年代』の幕を切って落とす役割を果たした。とくに彼の役割として重要なのは、浪費文明を批判することのみならず、環境派内部の論争を活性化させた点にある。たとえば、現在の体制を所与のものとして部分的・暫時的改良を目指す「リベラル環境主義」（あるいは個人主義を基盤としたエゴ・セントリズム）、人間社会内部の矛盾を軽視して短絡的な「人間中心主義批判」を繰り返す「ディープ・エコロジスト (エコ・セントリズム)」の双方を批判してきた。その理由は、どちらも支配層によるエコ・ファシズムつまり強権的環境管理を補完する危険性を察知していたからである。

そこで、やや定式化すぎるかもしれないが、ブクチンの環境史的位置づけは次のようになるだろう。「環境保全＋社会的不正義」はエコ・ファシズムあるいは国際的「南北関係」に置き換えれば環境植民地主義だが、現状の「環境破壊＋社会的不正義」同様、容認できるものではない。一方「環境破壊＋社会的正義」は論理的には成立しそうだが、実際に環境破壊型の社会には持続可能性 (sustainability) がないので、世代間の正義が成立しない。他方「環境保全＋社会的正義」をめざすブクチンは、環境人種差別 (environmental racism) や NIMBY (not in my backyard) 症候群や公

14 二十世紀末におけるブクチンの「ソーシャル・エコロジー」とフォアマンらの「ディープ・エコロジー」の対立に関しては、拙稿「環境と経済と社会の持続可能性 アメリカのエコロジー論争を中心に」木村武史編『サスティナブルな社会をめざして』（春風社、2008）を参照されたい。

害への反発を機に高まる環境正義 (environmental justice)、環境的公正 (environmental equity)、環境民主主義の思想的系譜に属すと考えてよい。要するに、ブクチンは60年代以降主流化していった「リベラル環境主義」と「ディープ・エコロジー」の両方に、さらなる認識の広がりを求める実面にラディカルな提案を極めて早いうちから展開していた、という点で評価されるべき人物なのである。

年表

- 1910s Murray's Russian Jewish parents active in the Russian revolutionary movement/immigrated to the United States
- 1921 *born* in New York City
- 1930 joined **Young Communist League**
- 1936 involved in organizing activities around **the Spanish Civil War**
- 1939 left Communists due to the Stalin-Hitler pact; aligned with **the American Trotskyists** ; joined **Congress of Industrial Organizations** mid-40s served **the U.S. Army**; joined **United Auto Workers (UAW)**
- 1948 participating in **the great General Motors strike** working with a group of dissident German Marxists in New York (**International Kommunisten Deutschlands**)
- 1952 "The Problem of Chemicals in Food" Contemporary Issues
- 1962 In Our Synthetic Environment (pseud. Lewis Herber) [anarchist tradition of Peter Kropotkin, decentralist and antihierarchical ideas]
- 1964 "Ecology and Revolutionary Thought" [social ecology = ecology + anarchism]
- 1965 Crisis in Our Cities
- 1965 "Towards a Liberatory Technology" [a new ecotechnics using alternative, renewable energy sources and microtechnologies]
- 1969 "Listen, Marxist!" [warning SDS against its imminent takeover by a Maoist group] start teaching at **the Alternative University** in New York, and **City University of New York in Staten Island**
- 1970 Ecology and Revolutionary Thought
- 1971 Post-Scarcity Anarchism
- 1974 co-founded and directed **the Institute for Social Ecology** in Plainfield, Vermont
- 1974 start teaching at **Ramapo College** of New Jersey
- 1974 The Limits of the City
- 1977 The Spanish Anarchists: The Heroic Years
- 1980 Toward an Ecological Society
- 1982 The Ecology of Freedom: The Emergence and Dissolution of Hierarchy
- 1983 retired from a full professor of social theory from **Ramapo College**
- 1984 Re-Enchanting Humanity: A Defense of the Human Spirit against Antihumanism, Mysticism and Primitivism
- 1986 The Modern Crisis

- 1987 [Philosophy of Social Ecology](#)
- 1987 [The Rise of Urbanization and the Decline of Citizenship](#)
- 1987 Initiating “The Great Debate” between Social and Deep Ecologies at **the Second National Green Gathering**
- 1988 co-founded **the Left Green Network**
- 1990 [The Philosophy of Social Ecology: Essays on Dialectical Naturalism](#)
- 1992 “The Ghost of Anarcho-Syndicalism” [distancing from anarchism]
- 1993 [Deep Ecology & Anarchism: A Polemic](#)
- 1993 [Which Way for the Ecology Movement?](#)
- 1994 [To Remember Spain: The Anarchist and Syndicalist Revolution of 1936](#)
- 1996 [The Third Revolution. Popular Movements in the Revolutionary Era](#), 4 vols (1996-2003)
- 1997 [Social Anarchism or Lifestyle Anarchism: An Unbridgeable Chasm](#)
- 1997 [The Politics of Social Ecology: Libertarian Municipalism](#)
- 1999 [Anarchism, Marxism and the Future of the Left. Interviews and Essays](#)
- 2002 “The Communalist Project” [rejected anarchism altogether in favor of communalism]
- 2006 *died* in Burlington, Vermont

* 本稿は「科学研究費補助金 基盤研究 (A) 1960年代の米国における文化変容とその越境に関する総合的研究」の成果の一部である。